



日下部 きよ子 先生 御略歴

1944年（昭和19年）11月4日生
東京女子医科大学名誉教授

- 1969年（昭和44年）3月 東京女子医科大学卒業
- 1969年（昭和44年）5月 医師免許証取得
- 1969年（昭和44年）4月 東京女子医科大学放射線医学教室入室
- 1976年（昭和51年）8月 東京女子医科大学放射線科講師に就任
- 1981年（昭和56年）12月 東京女子医科大学放射線科助教授に就任
- 1993年（平成5年）4月 東京女子医科大学放射線科教授に就任
- 2010年（平成22年）3月 東京女子医科大学放射線科定年退職
- 2010年（平成22年）4月1日 東京女子医科大学名誉教授
- 2012年（平成24年）7月14日 逝去 享年67歳

専門領域 核医学 認定医資格 核医学専門医
研究分野 放射性アイソトープによる悪性腫瘍の診断と治療
内分泌核医学 放射線防護

日下部 きよ子 先生の役職歴（日本核医学会）

- 会長 平成16年11月7日～平成17年11月13日
- 理事長 平成17年11月14日～平成19年11月6日
- 理事 平成11年10月8日～平成15年10月29日
平成17年11月14日～平成21年10月3日
- 庶務担当理事 平成11年10月8日～平成15年10月29日
- 監事 平成15年10月30日～平成17年11月13日
- 評議員 平成元年10月21日～平成23年10月30日

日下部きよ子先生を偲んで

京都医療科学大学学長
遠藤 啓吾

日本核医学会元会長、元理事長、東京女子医科大学名誉教授 日下部きよ子先生が2012年7月14日、67歳で逝去されました。謹んで哀悼の意を捧げます。

日下部先生は放射線医学、特に核医学の分野で偉大な功績を挙げられ、日本核医学会では理事長、会長として学会に多大な貢献をされました。日下部先生に公私ともにお世話になり、また先生の後任として日本核医学会理事長を拝命したのとして、先生の業績を本誌に書き留めさせていただきます。

福島原発事故が原因となって放射線・放射能による健康影響が社会的に大問題になっていますが、10年間にわたって文部科学省の放射線審議会委員を務めるなど日下部先生は放射線防護の第一人者でもありました。福島原発事故以降、国民の放射線・放射能に対する不安は頂点に達しており、日本国にとっても現在最も必要とする人材ただだけに、この時に先生が逝去されたことは「天の不条理」と嘆かざるを得ません。

先生のご専門は、放射線防護に加えてRIによるがんの診断と治療、内分泌核医学でした。特にバセドウ病、甲状腺癌のヨウ素131治療、放射性同位元素内用療法については常に日本をリードしていました。先生が中心となって作成したヨウ素131治療のパンフレットは大好評で、患者、病院関係者に何万部も配布されているはずですが、診療報酬については「放射性同位元素内用療法管理料」や「放射線治療病室加算」が新設され、さらに2010年に大幅に増点されましたが、日下部先生の長年の努力の賜物です。また現在話題になっているヨウ素131治療を30ミリキュリーまで外来治療できるという制度も先生が完成させたものです。日本核医学会会長として秋の学術総会を主宰するとともに、学会理事長として日本核医学会春季大会を現在の形にしたのも日下部先生でした。

このような医療制度の改革、手厚い診療報酬は日本の医療にとって最も重要なものですが、論文になることもなく、厚生労働省の担当官とのやりとりを公開、公表することなく、誰が尽力したか分からないかもしれません。しかし身近に先生と接した関係でよく事情を存じていますが、日下部先生なくしてはできなかつたことです。

東京女子医科大学教授として学生教育、後輩の指導に取り組むとともに、女子医大病院をトップレベルの核医学施設として完成させ、核医学検査件数が全国で最も多い診療施設を築きました。PETの臨床をまとめた先生の「読影までの完全ガイドーがん診療のためのPET/CT」(2006年、金原出版)は、がん患者のPET/CTの読影にあたって欠かせない名書となっています。

日下部先生のご冥福をお祈りするとともに、残された会員が核医学の振興に邁進することをお誓いいたします。